

七十九巻の終りに 津守 真

ある日の保育のことである。ひとりの男児が、ポスターカラーの色えのぐを、指や掌につけて、フィンガーペイントのように使いはじめた。その子どもは、その活動の中に魅きつけられて、相当の時間を過した。私がお子を見たときには、手足に絵の具がいっぱいついていて、その子がよく遊んだことを物語っていた。その子どもの日頃の遊び方には、もう一步、十分に遊びきれないものたりなさを感じさせるものがあった。この日は、どのようにしてかよく分らないが、担当の保育者は、その子が思いきって遊べるように誘うことに成功したのだと思った。

ちょうど、たまたま、この雑誌に何回か連載を書いておられる、オランダのユトレヒト大学のフェルメール女史が来日されて、この同じ場面を観察しておられた。保育のあとで、話し合いの時に、フェルメール先生も、この場面のことを話し出された。

その第一は、この子どもが、掌や手で、どろどろの絵の具に、じかに触れて遊んだことについてであった。子どもの保育においては、まず、おとなと子どもとの間の信頼関係がたいせつであるが、それは、子どもがおとなに、身体面で、皮膚を通して、じかに触れることからはじまる。それと同様に重要なことは、子どもが物質とじかに触れることである。それは、子どもにとっては、まだ形をなさない、渾沌とした感覚的体験であるが、直接に水や土にふれることによつて、子どもは、自分をとりまく物の世界に親しみを感じるのである。

その第二は、この絵の具を掌につけてこすりつける遊びの中で、ほんの一瞬間のことであるが、この子どもは、指先にえのぐをつけて、一本の線を引いたことについてであった。それは、指の先のえのぐが、形を作り出すことを、子ども自身が発見した体験である。それは、掌と物質とが一体をなしている段階から、自分と物質との間に、距離を見出したことを意味する。フェルメール先生は、この日の活動には、子どもが、自分で、このような発見をする自由があったことを指摘し、その重要さを強調された。

子どもの創造性は、人の目に立つような大きな活動や作品にあるのではなく、慎ましく、小さなものである。それが大人の文化を形成してゆく力になる。幼児の教育は、子どもとの間の毎日の小さな、人間の営みの積み重ねである。決して、巨大な構造のプログラムを実施することではない。この雑誌も七十九巻を終えるが、その間、人の目にふれないところで、このような保育の営みがたえることなく続けられてきたことを、また、これからも続けられるであろうことを思うとき、人の世界の豊かさを感じさせられる。